



〈発行所〉
 青山同窓会
 〒951-8127 新潟市関屋下川原町2-635
 新潟県立新潟高等学校内
 TEL 025-266-5268
 FAX 025-266-5268
 〈編集、発行人〉
 上村光司
 〈印刷所〉
 オリオン印刷機
 〒950-0963 新潟市南出来島1-19-1
 TEL 025-283-2151
 FAX 025-283-3804

あいらっし

青山同窓会会長 上村光司 (50回)



盛夏です。と書きましたが、近年は四季の推移がぎくしゃくとして、時候のあいさつに困ることが多くありました。大昔、天候不順は為政者不徳のしるしとされたそうですが、二十一世紀の日本は「改革」の二文字が跳ね回っています。年の後半は建設的な方に動いてほしいのですが、そういう中で難局に直面している同窓各位も、たくさんいらっしやると思います。自らの本領を発揮してよい成果をおさめていただきたい。それらを含めて、同窓皆様のご健勝をお祈りいたします。

さて母校は、新校舎の建物はすべて完工し、グラウンド整備を残すだけになりました。校舎全体を前にせり出し、体育館を取りはらったので、グラウンドは結構広々としています。「校舎竣工及び創立百十周年」の記念事業には、厳しい経済環境の中でたいへんご協力をいただきました。ありがとうございます。お陰さまで校舎内外の備品や環境整備は順調に進んでおります。

ただ、この記念事業について各位からご協力を願う目標金額を二千五百万円としています。六月末現在三〇四二人から約二千二百二十八万円になったところで足踏みしています。前回の創立百周年では四一三五人から三千九百二十七万円を寄せていただき、すべてが終わったわけではありません。手違いでまだであったとか、もう一肌ぬいでやろうと思われたら、是非々々事務局にご連絡ください。よろしくお願いいたします。

しかし、すべてが終わったわけではあります。途中学制は変わりましたが、四代目の校舎も創立の地に立つというものは、ありがたいことです。記念式典と祝賀会は別稿のとおりです。十月二十日(土)は、皆さん、奮ってご参加ください。

春、卒業式と入学式に出席いたしました。国旗・国歌の問題も含めて、集と個の点を見させて頂きました。全体として統一され、その中に個性の主張があり、後輩達はけっして金太郎アメではありませんでした。集と個の素晴らしい調和でした。人生に目標と目的を持ち、悩み迷い

ながらも瞳が輝いておりました。先日、日曜日にもかかわらず先生方のご努力により、本校初めの試みであります父兄の授業参観が実施されました。「高校生にもなって、授業参観？」と、お考えの諸先輩がほとんどだと思いますが、多発する十七才の事件に代表される様に、時代は大きく変化しております。パソコン・携帯電話、等の情報機器の発達で、情報が膨大に氾濫しており、その中で生徒達は現実と空想の世界が混然となり、自分のアイデンティティーさえ

たきました。前回は百年という大きな節目のお祝いでしたし、今の世の中、沈滞閉塞状況のもとで、よくこれだけの金額を出していただいたと、各位のご厚志に改めてお礼申し上げます。と同時に、会長の私としては、もっと繰り返しご協力をお願いする努力が不足していた、目標を割ることのなかった過去の実績に甘えていたと反省しています。

先日、PTAだよりに「伝統とは革新である」と寄稿いたしました。我が校には素晴らしい伝統が有ります。伝統とは長期に渡り継続することです。継続させるためには、時代と社会の変化に対応しなければなりません。革新が必要となります。「自立・文武両道」の基本は変わりませんが、IT革命・グローバルスタンダード・ポータルズなどにより、在校生の意識・価値感が大きく変化しております。対応を考え、革新を實行しなければならぬと思っております。

梅雨時の蒸し暑さの中、今年も元気な新人達を迎えて新人歓迎会講演会が行われました。今回は残念ながら、斎藤英四郎名誉顧問(36回)と斎藤伸雄名誉会長(44回)をご多忙につき欠きましたが、新人二〇名を含め一〇〇余人の参加を得て活気ある会となりました。新潟から

見失ってしまいます。ビジュアル・デジタル世代である彼らにとつて、肉眼で見ること・肌で感ずることが、より大切に必要になってきております。授業参観を実施することで、現象面で親が側にいること・子供のことを気にしていることを、認識させなくてはならないと考えております。私達の時代とは大きく異なっていることを、ご理解下さい。

ますらを達は、健在です

PTA会長 河崎順昭(74回)

平成十三年度PTA会長に選任されました74回生の河崎です。在校生達の充実した学校生活の環境作り、同窓会の皆様のご協力ご支援をお願い致します。

ながらも瞳が輝いておりました。先日、日曜日にもかかわらず先生方のご努力により、本校初めの試みであります父兄の授業参観が実施されました。「高校生にもなって、授業参観？」と、お考えの諸先輩がほとんど

今秋には、新校舎が竣工いたします。ハードの環境は完成いたしますが、ソフトに関しましては、今後とも学校・同窓会・PTAが対話を持ちながら一体となり、伝統の継続を考えていきたいと思っております。

平成十三年度東京青山同窓会

新人歓迎会講演会

二〇〇一年六月二十二日(金) 於 ホテルニューオータニ

梅雨時の蒸し暑さの中、今年も元気な新人達を迎えて新人歓迎会講演会が行われました。今回は残念ながら、斎藤英四郎名誉顧問(36回)と斎藤伸雄名誉会長(44回)をご多忙につき欠きましたが、新人二〇名を含め一〇〇余人の参加を得て活気ある会となりました。新潟から

見失ってしまいます。ビジュアル・デジタル世代である彼らにとつて、肉眼で見ること・肌で感ずることが、より大切に必要になってきております。授業参観を実施することで、現象面で親が側にいること・子供のことを気にしていることを、認識させなくてはならないと考えております。私達の時代とは大きく異なっていることを、ご理解下さい。

今秋には、新校舎が竣工いたします。ハードの環境は完成いたしますが、ソフトに関しましては、今後とも学校・同窓会・PTAが対話を持ちながら一体となり、伝統の継続を考えていきたいと思っております。

今秋には、新校舎が竣工いたします。ハードの環境は完成いたしますが、ソフトに関しましては、今後とも学校・同窓会・PTAが対話を持ちながら一体となり、伝統の継続を考えていきたいと思っております。

今秋には、新校舎が竣工いたします。ハードの環境は完成いたしますが、ソフトに関しましては、今後とも学校・同窓会・PTAが対話を持ちながら一体となり、伝統の継続を考えていきたいと思っております。

今秋には、新校舎が竣工いたします。ハードの環境は完成いたしますが、ソフトに関しましては、今後とも学校・同窓会・PTAが対話を持ちながら一体となり、伝統の継続を考えていきたいと思っております。

今秋には、新校舎が竣工いたします。ハードの環境は完成いたしますが、ソフトに関しましては、今後とも学校・同窓会・PTAが対話を持ちながら一体となり、伝統の継続を考えていきたいと思っております。

今秋には、新校舎が竣工いたします。ハードの環境は完成いたしますが、ソフトに関しましては、今後とも学校・同窓会・PTAが対話を持ちながら一体となり、伝統の継続を考えていきたいと思っております。

だきました。卒業わずか三ヶ月
足らずの教え子の顔つきがぎっ
と大人びて見えたことでしょう。
先生方もまぶしそうにされてい
た様子が印象的でした。

講演会の講師には、兵庫大
学教授の牛木素吉郎氏(59回)を
迎え、いまや新潟の、いや世界
の話題である「二〇〇二年ワ
ールドカップ」に関するお話をし
ていただきました。新潟にとつ
てのワールドカップとは何か、
ワールドカップを単なるスポー
ツイベントにしてはならない、
それを契機に、文化・経済をス
トップアップさせ新潟を世界に
アピールすべきと、大変興味深

◀ 新人のお礼のことば



い講演となりました。故郷新潟
が韓国と日本の二国共催という
サッカー史上前代未聞の事態を
引き受けて、在京の県人として
も座して静観できない心境です。
新潟に生まれ、日本各地で活躍
され、そして世界的なイベント
に関わる牛木先輩のスケール感
を目の当たりにして、新人諸君
には何よりの未来への刺激になっ
たのではないかと思います。

新人代表返礼の辞として相澤
悠太君が、同窓会の存在意義に
触れながら未来の社会を担う若
者らしいさわやかなスピーチを
披露してくれました。
さて、毎年東京では新人君達
を迎えているわけですが、その
年により何となくカラーという
ようなものを感じます。一昨年
と昨年はとにかく女性パワーが
感じられましたが、今年は骨太
な男子が揃い、まさに青陵健児
の若き力が横溢し会場の雰囲気
を支配しているようでした。そ
のエネルギーが伝搬するように
諸先輩方の気迫も上昇し、今回
の最年長でいらつしやる富所強
哉先輩(46回)の大声の乾杯、
校歌斉唱、応援歌に至って会は
最高潮に達しました。続く二次
会にはなんと半数の五〇人あま
りが参加し、新人を囲み盃を重
ねる大先輩方の奮闘振り兄か

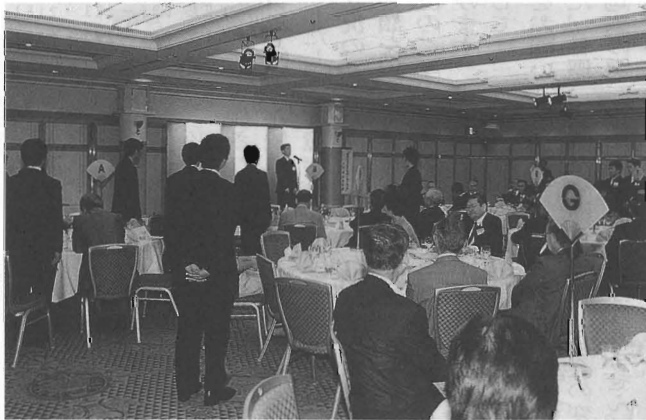
▶ 講演 牛木先輩



「新潟と2002年ワールドカップ」
講師 牛木素吉郎

親の如くに熱気を帯び、あとか
も東京赤坂の一角に地殻の変動
を引き起しそうなエネルギーに
溢れて感動的でした。46回から
109回まで六十三年の年齢差を貫
く共通の『根』を持つ強者ども
の一夜がこうして更けていきま
した。
最後に、斎藤英四郎名誉顧問
から新人達に向けて、心温まる
電文を頂戴したことを付記しま
してご報告のまとめとさせてい
ただきます。
(82回 日下部朋子)

◀ 各テーブルの新人を紹介



母校に戻って

小 湊 知 見
(88回)

この春の移動により母校に勤
務することになりました。

母校とはいうものの、校舎は
すっかり新しくなり、最初はま
るで別の学校に来たような感じ
を受けました(どこからどうやっ
て入ったらいいか戸惑ったくら
いです)。引越しやプレハブ
等のご苦労をされた方々に叱ら
れるかもしれないが、古い校
舎のうちに来たかったというの
が正直なところです。

私が入学したとき(昭和五十
二年)も校舎が一部改築中で、
一年生の時は生徒玄関のところに
仮設された教室(穴ぐら教室
と呼ばれていました)でした。
しかし、三年生の時は真新しい
教室を使うことができたなど、
校舎にまつわる思い出いろいろ
あります。
校舎は変わってしまいましたた

が、母校に帰ってきたのを実感
したのは何と云っても「丈夫」
を聴いたときです。卒業以来ほ
とんど耳にする機会がなかった
ので、対面式で聴いたときには
とても感動しました(若干節回
しが変わっていますが)。また、
青陵祭で全員の「丈夫」合唱を
聴いたときは、全身が身震いす
るような思いでした。生徒の雰
囲気はだいぶ変わったような感
じも受けますが、それは時代の
変化によるもので、「丈夫魂」
はきつと変わっていないのだと
思います。

これから少しでも母校の役に
立てるよう、微力ながら頑張っ
ていきたいと思っておりますので、よ
ろしくお願いいたします。

教育実習 — 雨のち快晴 —

平成9年卒 浅井 史 緒
(国語)

教育実習、一年前申し込みを
した日から、何度この言葉に恐
怖感を味わわれたことでしょう。
北海道という海外の地にいるた

めに、事前に直接打ち合わせに行くのもままならず、ひたすら電話で指導教官の五十嵐達郎先生を質問責めにしてしまいました。それでも緊張はとげきれず、範囲の予習を始めれば知恵熱でダウン、というさんざんな状態で初日の五月二十八日を迎えることになりました。

かつて灰色の四角い建造物があつた所には、ガラスを多用した吹き抜けのある輝かんばかりの校舎が出来ていました。生徒用玄関に向かいそうになる足を引かずしてガラスの筒を通過してみると、中は内履き。在校時のあまりの違いにいよいよ心の疲労はピークに達し、余程情けない顔をしていたに違いありません。開講式早々、鱒先生に唯一名指しで「疲れてますか？」と聞かれたくらいです。頭の中は土砂降りであつた前がわからない、困惑の極みにいました。教壇実習も他の実習生に比べて遅く、早くから行った人が、向いてないかも……、などつぶやき遠い目をしているのを横目に、不安だけがつのりました。しかし、授業というのは生徒にぶつけてみるまで何も分からないのです、という五十嵐先生のお言葉は、杞憂ばかりであつた私に一筋の光を差してくださいました。

いざ教壇へ、と教室へ足を踏み入れた時、旧校舎の木製教壇が目に入りました。高校時代は問題を解かされるために登つたのだったなあ、と、新校舎での思わぬ再会に、当時の緊張を思い出す余裕が生まれ、心はほぐれていったのでした。教壇に登る者がどの立場でも緊張するのは、生徒も教師も日々学ぶ者であるからなのだな、と思ひ至りました。生徒に「学ぶ」という

自主性を持ってもらうことが教師の役割であつて、一クラス約四十人が学ぶことに示す意欲の度合が取りもなおさず教師自身の質といえるでしょう。生徒は鐘であり、また明らかに導いてくれる教師でもあるわけです。教職についてた者は、生徒から学ぶことが教えることだと感じるのではないのでしょうか。卒論の題材に取り上げた『禮(礼)記』(学)記篇の一節、「學(学)ふるは學(学)ぶの半ばなり」が、やっと身に照らして理解できるような気がしています。そうして行つた教壇実習は、納得いくものとは言えませんが、どんよりした悩み方から、次はどうするべきかという明るい思考法に変える転機となりました。

他の実習生の存在も、二週間非常に支えとなりました。どんな強者たちが来るのかとビクビクしていたのですが、控室での初日は、皆が皆机に向かい、筆を走らせる音だけが静かに鳴り響くという生真面目ぶりで、安心を通り越してなじみづらさまで感じたものでした。しかしやはり同じ目的を持つ者同士、打ちとけるのは早く、遅くまで批評し合つたり資料作りを手伝つたりと、互いを磨き合うことができました。

そして何より実習生全員がうれしく思つたのは、生徒たちの朗らかで優しい反応でした。最終授業で涙してしまつた程です。青陵祭準備で大変なはずなのに、私の説明不足な所を質問しに来てくれるあの一生懸命さ。青陵祭当日、大雨にも負けずに、最後はついに晴れ間を呼び寄せたというのもうなづける爽やかさでした。締めめ丈夫を聞いた時には、はじめあれほどよどんでいた私の心まで晴れわたつていくような気がしました。

直接交流のない先生もいらつしゃいしましたが、特に国語科の先生方、HPの担任の先生、指導教官の先生には、大変お世話になりました。素晴らしい母校、新潟高校で実習の機会をお与え下さつたことを心より感謝しております。

火坂雅志氏(83回・歴史小説家) 大作『覇商の門』を出版

上杉雅之(60回)



去る四月二十二日、紀伊国屋書店新潟店で、火坂雅志氏のサイン会が催され、多くのファンが列を作つた。氏は昨年新潟日報朝刊紙上に「黒衣の宰相」を連載し好評を得たが、本年四月『覇商の門』を祥伝社から出版したのだ。

火坂氏は昨年新潟市で講演会を開き、「戦国乱世の参謀たち―信長・秀吉・家康の知恵袋」と題して、戦国のヒーローたちを舞台裏で支えた人物模様を語つた。平成11年小学館から出版された『全宗』は、秀吉の侍医から参謀になる姿を描いた出世作(吉川英治文学新人賞候補作品)。今回の『覇商の門』は、堺の商人、今井宗久が主人公である。徒手空拳から身を興した宗久は松永弾正や若き日の秀吉らと手を組んで織田信長の天下取りを助ける豪商に出世し、千利休と並ぶ茶人としても知られる。現代風に言えば、無名の若者がハングリー精神に突き動かされ、ベンチャービジネスに取り組み、『顧客の徒』として戦国大名と五角にわたり合う。古い規制の網の目をかいくぐり、鋭い勘で時流を察知し、「一年先、五年先、いや十年先を読み、つねに新しい手を打ち」(本文より)成功する物語である。

次回出版予定の作品は、金地院崇伝が主人公である『黒衣の宰相』とのこと。新潟日報朝刊紙上に一年かけて連載したものを書き下ろす。火坂氏は言う。「行き先不明の時代、われわれにとって魅力的なのは、力なき善人ではなく、崇伝のような力ある悪人なのかもしれない」徳川家康の参謀の辣腕ぶりが今から楽しみである。

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の順に日本という国を戦国時代から統一された安定国家へと変えた大事業を一つの狂歌が見事に言い当てている。織田が掲げ、羽柴がこねし天下餅、坐つて食うが徳川家康。この三人のヒーローが近世日本の歴史の舞台に登場し演技を展開した。舞台裏にあつて支えた陰の立役者がそれぞれに何人かいた。その陰の人物に光をあて主役にし、三人のヒーローを脇役にした歴史小説を世に問うているのが作家、火坂雅志である。

今井宗久と信長(『覇商の門』祥伝社)、施薬院全宗と秀吉(『全宗』小学館)、金地院崇伝と家康(次回書下し作品予定)。これらの作品作りに共通していることは、主人公に関する現存する資料が少ないことだと作者は言う。しかし、「埋もれていた陰の人物の生涯をしっかりと調べイマジネーションを膨ませば、人の心をとらえる大きな物語が紡ぎ出せる」と作者は言い切つている。『覇商の門』の書評に、「史料の緻密な読み込みで多様な人物が登場する激動期を見事に描き切つた」とある。(日経新聞読書欄)

昨年新潟市で開かれた『作家、

火坂雅志を囲む会」で、新潟高校時代に於いてのインタビューに答えて次のように語った。「高校三年の時、一年間新潟日報社に詩やコントや評論文などを投稿し続けたが、一度も採用されなかった。」また別の質問に答えて次のようにも言っている。「英語の授業の前に、上杉先生がよく宮沢賢治の話をして下さったのが印象に残っている。」後日、学校に残っている指導要録の人物評にあたる欄の筆者の所見を調べてみると次のように記していた。「昭和四十九年一年間、新潟日報、校内新聞、雑誌に投稿を続ける。「根気強さ」と「向上心」はA多方面に興味を持ち多才。文学青年で詩作に才能あり。」

評論家の縄田一男氏は「歴史の表裏双方に目をくばりつつ、興味満点の物語を紡ぎ出す」と火坂作品を評している。かつての文学青年も今や44歳の気鋭の歴史小説家として、次々と作品を発表し、歴史時代小説の世界に新風を巻き起こしている。同窓諸兄姉氏の皆さん、「青山」が生んだ作家、火坂雅志に絶大なご支援をぜひとも賜りたい。

嬉しいニュース 女子生徒会長副会長誕生

小池 寿哉 (44回)

会報72号「母校は今」で、生徒会立合演説会が行われ、投票の結果高率で女子の会長副会長が信任され誕生したとのこと。もう手を挙げて喜びました。

今世紀は女性の世紀と言われ、「男女共同参画基本法」も昨年成立しました。私も「にいがた女性会議」会員として、又「女性議員を増やそうネットワークにいがた」の会員としても、男女平等や女性の地位向上に向けて、ささやかながら心を動かして活動しております。

近時所感

旧校歌について

富所 強哉 (46回)

本会報七二号の江口直禎氏による記事に触発され、旧校歌についての最近の所感の幾つかを述べさせて頂く。

作曲家大和田愛羅氏についての氏の詳述のお陰で、この歌が母校の先輩による作曲であることを始めて知った。校歌に対する愛着を会報で何回か述べさせて頂いた者としては、唯々恥じるばかりである。この周知と言われる事実(同号三頁・五二回生)を知らなかったのは音楽に関心が薄いからであるが、所有する唯一の記念年史である創立六十周年記念の青陵回顧録にこのことの記述がなかった(と思う)にしても、九十周年記念の毎日新聞新潟支局刊行の「青春の森」にOBとあるのを見落していたのである。

氏はまだこの歌の四番の歌詞のうち昭和十五年の校歌認定時の付帯条件になかった部分の改竄(敢えて改竄と言う、現在なら著作権問題など大変なことであろう)について述べておられた。その事情についてはいろいろな考えがあり得ようが、それを知る人のいなくなった今では、当時の文書によるのでなければすべて推察の域を出ないであろう。そのことについて氏から頂いた連絡によれば、県立公文書館に対する氏の照会に対し、この部分関係どころか認定申請書の認定書すら同館に存在しないとの回答があったという、何とも心許ないことである。

ところで五番の「白砂：↓真白き：」は単に表現の問題とするにしても、四番の改竄は作者の意図を大きくねじ曲げているように思えてならない。旧制中学なればこそその「青陵健児」が繰り返し現れるが、この四番の「光輝を変えぬ歴史もて青陵健児ここにあり」は凛とした少年の姿を現しているようで、私にはこの校歌の中で最も高揚した部分と思われる。

それにしてもいろいろな行事で歌われるのが一番と五番だったり、時には一番だけというようになってきているのは残念でならない。漢詩の起承転結で見ると、詩は全部を通して読んでこそ作者の意図が理解できるもので、校歌は本来全曲を歌うように作られたものである。せめて百十周年の祝賀会では原作の歌詞で全曲を歌うようにして頂けないだろうか。勿論原作歌詞になじみのないお方が大多数なのは承知しているが、記念行事に免じてお付き合いの願いたいものである、歌詞を知らなくても見ながら歌えるのだから。

次に旧校歌に対する今の人達の姿勢について。母校を卒業して東京方面に出てきた人達に対する東京青山同窓会恒例の新人歓迎会で数年前に新人に校歌の首領を取ってもらうことになった際に、応援歌のように大抑な身振りでリードを始めたので「マテッ」と制止したことがあったが、昨年新潟でも同様なことがあった。このことから今では旧校歌は応援歌の一つと同じくらいに考えられている節が窺われる。校歌が「百里」に変わってほぼ五十年になる今では仕方のないことかも知れないが、校歌はどこまでも校歌であること

を忘れないで欲しい。まさか現校歌「百里」を応援歌のようなやりかたでリードすることはあるまい。校歌はリードも斉唱も直立の自然体であるべきであり、これからの後輩には是非そのように指導して頂きたくこの紙面を借りて母校にお願いします。



54・55同期 東北大学名誉教授

吉原賢二君著 岩波ジュニア新書三七二

「科学に魅せられた日本人」の推薦

今 湊 良 敬

吉原賢二君の著書が本年五月一日岩波書店から発刊された。二〇世紀の日本人科学者約一〇人の評伝だが、類書にはない、ちじむらしい特色を持っており、きわめて好評のうちに滑り出したことである。

専門的な内容と一般人にもわかりやすいように噛み砕いた文表現にしており、科学者たちの活動した環境や社会とのかかわりを適確にとらえ、かつ、これらの心情や動機に共感できる

春のゴルフコンペ

優勝は61期

勝 又 宣 夫 (75回)

恒例の青山OB会ゴルフコンペが、四月三〇日紫雲ゴルフ倶楽部で開催されました。会の名称が新しくなって早くも一〇回

二、三日前の雨天予報とは違って変わって上天気。そういえば、雨に降られた記憶がない。初夏を思わせる陽気のなか、半袖のプレーヤーが目立ちまし

えて名前は伏せますが、60期のS先輩、忘れてましたか？

優勝は、45、43で回った61期の木村昇氏。二位も61期の加藤榮一氏。と来れば、期対抗団体戦は61期のダントツ優勝もいたしかたないところ。

上位三名のスコアで競う団体戦。61期は長谷川市長を含む三名の出席。「あれが足を引く張ったと言われないように、必死で回ってきました」プレッシャーを感じない61期のみなさんでした。

個人戦優勝の木村氏は、「運以外のなものでもありません。実力では勝てず、隠しホールのおかげ」と、いたって謙虚。青陵健児の面影をかいま見るご発言。でも先輩、12ホールペリアは実力が80%以上ですよ。ちなみに二位は71期。

表彰式はお馴染み「古町安兵衛」。締めくくりは「ますらお」の大合唱でした。秋もやりますので、是非たくさんご参加下さい。同窓生全員に案内が行くわけではありませんで、十月になったら幹事までお問い合わせ下さい。

【75期 富山】

〇二五―二二八―七五八六 女性に沢山参加してほしかった、という声が多かったことを付記しておきます。

58回卒業同期会 新潟東京合同玲瓏会

58回卒業生「玲瓏会」と称して、回数に因んで毎年五月十八日に同期会を行って来た。又、首都圏在住者はこれも「東京玲瓏会」として、毎春秋に同期会を行い、それぞれ三〇〜四〇名の会合を行って来た。五年前に村杉温泉で新潟・東京合同の会合を行い、その際五年毎に合同でやろうと云う事になった。それで今年、卒業五〇周年と古稀の祝を兼ねて、湯沢温泉で、五月十八日(金)に一泊して行った。

58回卒業は、新制高校の第二回目として、昭和二十五年三月に卒業したのだが、各自の希望により一年前の昭和二十四年は旧制中学五年で卒業した者が居り、

更に成績のよい者はその前年に旧制中学四年から旧制高校へ入学して居り、全員が同時に卒業したわけではない。又、年令にしても一年遅れて入学した者、外地から引揚げて来て、年令よりも下の学年に編入された者が居り、一、二年年上の者も居て、必ずしも、全員一致して古稀と云うわけではないが面倒な事は云わないで、昭和十九年四月に県立新潟中学へ入学した期に入っていた者と云う事でまとまっている。

だが昔の古稀と違って、大多数がリタイヤ済の年金生活者で、気楽で陽気なお年寄りの集りであり、大きな病気や大手術を体験した者も居り、健康上の不安が無くは無い年令だし、物故者も四十数人居られる。



翌日は、朝食後、ロープウェイでアルプの里へ登り、遠くは四国、広島県、関西へと帰路について。今回は東京の幹事、北井一郎と細貝実が一萬五万円を破格のサービスの会場を設定して呉れ、皆大いに満足した。五年後に又、合同会合をやるが、その間にも新潟の者が東京の会合に参加し、又、その逆も歓迎して互いの交わりを深めていきたい。(加藤高弘記)

青山54・55回同期会開催

幹事 保倉 修

私達青山54・55回同期会は毎年一月五日の夜、恒例として開催してきたのですが、今年だけ都合により変更し、一月八日（成人の日）の昼に同期金子隆弘宅（蒲原神社青海殿）で開催致しました。今回は昨年春に勲五等双光旭日章を受賞された今湊良敬さんと同じく秋に勲五等瑞宝章を受賞された保倉保興さんが、この写真の通り記念額入賞状を持参出席されたので受賞祝賀会も併せ行ないました。

尚、今回出席者の中には、私達太平洋戦争終結後の一九四六年（S二十一年）一九四七年（S二十二年）に卒業以来実に五五年ぶりに始めて参加の方も数名おられ感激しました。会は写真撮影、同期逝去者に黙禱、校歌斉唱、経過説明、受賞者の祝賀式のあと乾杯、懇親会に入りました。参加者全員の自己紹介、近況報告も行ないました。話題の多かったのは同期の消息や全員が古稀を越し、満七十一才〜七十三才となり、健康上の問題や健康法もありました。卒業時（二年間）で二五〇名でし

たが、現在までにその1/3以上の方が逝去しております。最後はこれも恒例の応援歌の大合唱、万才、三本メで散会致しました。

当日の出席者（下段の列より上段へ、各左より右へ）石本林三、山田甚平、今湊良敬、金子隆弘、保倉保興、今井兼智、佐藤清、保倉修、長谷川政彦、武藤輝一、佐藤茂、味方健吉、富所寿男、中山昌鷹、渋谷登、宮尾益敏、中野勉、磯部昭一、西脇進、平山頭二、齊藤雅彦、山本義一、砂山晃、近藤定光、常木剛、松本明芳、山際和夫、浅妻昭三、本間一男、玉木賢一、青山昭郎、佐藤壮一、高橋弘、早福卓、水戸陽一、細野助栄（列外左上）、土田達禪（写真無し）〔以上37名〕

の差である。昔はなかった視聴覚教室はすばらしい。一学年全員がスッポリ入れる広さがあり、音響効果が素晴らしくその他の設備も完備し、これでは学習効果が向上するに違いないと思われた。管理室も広々とし、一般教室、特別教室も大変立派で木造校舎で過した我々には羨しい限りである。東京から来た小林栄作君の話で質実剛健とはホド遠いなど云う感想もうなすける。また、自然光の入りが悪く薄暗い所もあったと云う者もいた。五〇分程度の見学で参加者は二名であった。

次に祝賀会は田辺啓三先生、佐野元先生、藤田久喜先生の三人の恩師をお招きし、記念写真の撮影から始まった。懇親会場には懐しい応援歌のテープを流し大いにムードを盛り上げた。セレモニーの次第として全員で校歌斉唱、ご逝去なされた恩師並びに級友への黙禱を行った。同期生を代表して関根彰圓の挨拶は我々は風雲急を告げる昭和二〇年の入学で六年間過させて頂いた。故人になった同期の木村明君の講演を引きあいに出し、これから一〇年後の卒業六〇周年には元気で参加したい趣旨の話であった。

恩師を代表して田辺先生からこの会に来ると自分の同期会と錯覚を起す様な気がする、とおっしゃった。田辺先生が我々の学級担任の時、教務室で同僚の先生から田辺ルームで煙草の匂いがする。と云われて行って見たが誰が吸ったのか解らなかつたと云う。

また生徒から先生への見舞が大変だから怪我をしないで欲しいと云われたり、転勤になると引越しの手伝いに来てくれたり、恩師として接してくれて大変嬉しく思っていると云う内容のご挨拶であった。

そして飯塚実君から恩師への記念品の贈呈をして貰った。学年幹事の伊佐修君が最近ノドを患っているとの事で代りに笹川一雄君より事務局より諸々の報告の中で昨年四名の同期生

が亡くなった話があった。その他の連絡として会計幹事の山川健君から小野寺宏君へパトントンチをするとの報告があった。東京から参加してくれた園城英二君の乾杯で祝宴が始まった。その後、佐野、藤田両先生から簡単なご挨拶を頂いた後、しばらく談笑の時間が過ぎた。七時過ぎからビンゴゲームを行った。十六番迄の賞品を用意したが、一番先に上ったのは丸山勲君であった。

楽しく話合い、酒を汲み交し恩師と歓談し、八時半過ぎ次回の再会を約して菊地晴彦君の閉会の挨拶並びに万才三唱で祝宴は終了した。とにかく年を忘れての想い出に残る一夜であった。出席者は次の通りです。

恩師は田辺啓三先生、佐野元先生、藤田久喜先生の三先生、同期生は相川義信、安食裕夫、新川滋、伊佐修、井上俊夫、飯塚実、江口昌夫、園城英二、大石正夫、小野寺宏、川上昭八郎、川上忠男、菊地晴彦、栗田順之、栗林重夫、小林栄作、笹川一雄、佐藤吉雄、重野行甫、品田茂博、島崎毅、鈴木誠一、関根彰圓、関根直哉、中野文郎、長橋敏雄、西脇諭、樋口卓、広野樹、福島隆一、藤由学、丸山勲、皆川潔、宮田兼好、村山健二、矢羽元夫、吉川篤、若木滋 以上四十一名。

青山同窓会第59期

卒業50周年記念同期会報告

宮田兼好(59回)

我々59期生は六月九日卒業五〇周年を記念し、新築完成した母校見学と祝賀会をホテルサンルート新潟で開催した。

母校見学は同日午後三時二〇分新潟高校正面玄関に集合し、校内幹事の山田先生のご案内で

始まった。今迄の校舎は羊羹を並べた様な単純な形であったが、新校舎は全体が半ダ円形に突き出しスマートさが目をひいた。バスケットコートが二面取れる広さの体育館が二つ、我々の頃の東運動場、西運動場とは泥雲

の差である。昔はなかった視聴覚教室はすばらしい。一学年全員がスッポリ入れる広さがあり、音響効果が素晴らしくその他の設備も完備し、これでは学習効果が向上するに違いないと思われた。管理室も広々とし、一般教室、特別教室も大変立派で木造校舎で過した我々には羨しい限りである。東京から来た小林栄作君の話で質実剛健とはホド遠いなど云う感想もうなすける。また、自然光の入りが悪く薄暗い所もあったと云う者もいた。五〇分程度の見学で参加者は二名であった。

恩師を代表して田辺先生からこの会に来ると自分の同期会と錯覚を起す様な気がする、とおっしゃった。田辺先生が我々の学級担任の時、教務室で同僚の先生から田辺ルームで煙草の匂いがする。と云われて行って見たが誰が吸ったのか解らなかつたと云う。

また生徒から先生への見舞が大変だから怪我をしないで欲しいと云われたり、転勤になると引越しの手伝いに来てくれたり、恩師として接してくれて大変嬉しく思っていると云う内容のご挨拶であった。

そして飯塚実君から恩師への記念品の贈呈をして貰った。学年幹事の伊佐修君が最近ノドを患っているとの事で代りに笹川一雄君より事務局より諸々の報告の中で昨年四名の同期生

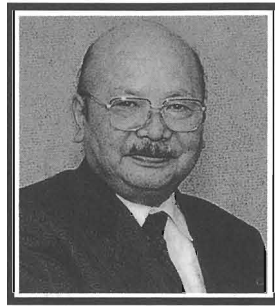


追悼

木村明君を偲んで

伊佐 修(59回)

ご葬儀で味方村の七穂小学校同級生で竹石貞三郎氏が読まれた弔辞は、木村君の知られざる生涯を浮き彫りにするもので、参会者に大きな感動を与えました。此処に木村君のご遺族と竹石氏のご諒解を得て、青山同窓会報に掲載させて頂きます。



弔辞

木村君、俺たち仲間の誰もが、君が早朝の訃報を、その夜遅くなるまで知らなかった。ましてや、君が三〇日も入院していたということも、そのうえ、三年前の発病で入院していたことも、今度が再入院の、大変な病魔との最後の戦いであったということも、今こうなつて初めて聞かされたことで、ただただ驚いています。

それにしても、君ほどの堂々の体軀の、正義一筋の男を、俺たちが小学校四年のとき太平洋戦争が始まって、小学校を卒業した年に戦争が終わった。その間、学校で勉強をした記憶よりも、堤防の開墾や勤労奉仕、イナゴ捕りや落ち穂拾い、それに戦争の末期には竹槍訓練までさせられて、勉強どころではなかった。都会育ちの君に、よくそれが堪えられたね。

クラスでは優秀だった君は、新潟の旧制中学校に進み、ゲートルを巻いて通学する姿を時どき見かけたが、ある日、君はその学校を退学して、村に帰って百姓を始めた人づてに聞いた。

君は、そんな暮らしの中で、一念発起して、近くの夜間高校へ通い始めた。昼間は農業、夜は学生という苦学の道に進んだのだった。小学生時代は、都会育ちのひ弱にしか見えなかった君が、百姓をしながら夜間高校に通い通して、その上、見事念願の新潟大学医学部に合格したということとは、誰もが信じられないほどの快拳だった。よく頑張ったね。

君にこれだけの初心を貫く不屈の信念を与えたのは、我々七穂小学校の大先輩、味方村出身の平澤興先生の馨咳に接し、その薫陶に浴する幸せがあつて

木村君、君はよく頑張った。俺たちが小学校四年のとき太平洋戦争が始まって、小学校を卒業した年に戦争が終わった。その間、学校で勉強をした記憶よりも、堤防の開墾や勤労奉仕、イナゴ捕りや落ち穂拾い、それに戦争の末期には竹槍訓練までさせられて、勉強どころではなかった。都会育ちの君に、よくそれが堪えられたね。

君は、そんな暮らしの中で、一念発起して、近くの夜間高校へ通い始めた。昼間は農業、夜は学生という苦学の道に進んだのだった。小学生時代は、都会育ちのひ弱にしか見えなかった君が、百姓をしながら夜間高校に通い通して、その上、見事念願の新潟大学医学部に合格したということとは、誰もが信じられないほどの快拳だった。よく頑張ったね。

君は退職後、「聴診器をきっぱりと封印して、世界を見て歩きたい」と言ったとき、「それが出来たら素晴らしいね」と、半ば羨望の思いで賛意を表したが、もしかしたら、その頃すでに、君の宿命の病魔が君の体を蝕み始めていたのではなからうか。一昨年来数回にわたって、考古堂書店から発売の医学雑誌「ミクロスコピア」に君が寄稿している「フランス紀行」を興

味深く読んでいるが、君が中世の巡礼となつて、廃墟のようなホスピスを訪ね歩いている姿が、今となつては君自身の病軀の癒しの場を求めての、終焉の旅だったように思えてならない。もう愚痴は言うまい木村君、小学生の頃、ひ弱で泣き虫だった君は、誰にも負けない強い人になった。誰にも負けない立派な足跡を残したね。天国の平澤先生も「明君、よく頑張ったね、もうこちらへ来て休んでいいよ」と、喜んで下さっているよ。

また、上級生になったときには、主将という大役に抜擢された。チームのリーダーとして現役時代を送れたことも私にとつて貴重な財産となった。しかし、私には中学時代から引きずつていた腰痛があつたため、高校の練習にも思うように参加できなかった。そのため、幾度となく主将という重役を降りようと考へ、伊藤修監督にもその考えを打ち明けたが、監督から励まされながら続けることができた。現在、新潟高校に野球を教えるに行つて五年目になるが、現役時代に主将をしていたおかげで今の選手達に野球を教えることができるのだと感謝している。高校時代、私は故障や怪我をすることが多かった。公式試合や夏の大会の前の練習試合を出場することができなかったこともある。同期の仲間そして後輩には多大な迷惑をかけてばかりいた。こんな主将でもよく一緒にやってくれたと感謝している。

野球で得た我が財産

平成六年卒 青木 晃

振り返れば、私の野球人生は、その都度その都度、まさに人と

の出会いに支えられ、そして作られたものであった。中学、高校あるいは大学時代の監督、そして仲間達。多くの方のおかげで私は好きな野球を存分に楽しむことができ、そして続けることができた。自分も確かに頑張ったが、何よりも人との出会いこそが私を育ててくれたという思いが強い。先ほど述べたが、腰痛で悩んでいたことでその思いが強くなった。人間は「人の間」と書くけれど、本当にそうだと、今、改めて思う。「人」は

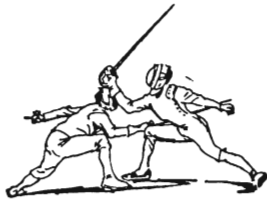
フエンスシング部

OB懇親会の報告

遠藤 聡一 (87回)

一月六日(土)古町つぼ八において、フエンスシング部OB懇親会を行い、お忙しい中、元顧問の赤井田秀光先生、OB三五名にご出席を頂きました。比較的若手の出席も多く、年代の分け隔てなく、楽しく盛り上がった会になりました。

全国選抜大会、インターハイ、国体に出場など昨年の現役の活動や、新体育館完成に伴う新練習場が、当初予定されていたフエンスシング場ではなく、第二アリーナのギャラリーになったこと等が報告されました。



青山バドミントンクラブ

日野浦 広昭 (77回)

支えあってできている文字なんだと、しみじみ実感している。せなのだと思ふ。だから私は野球を通じて出会うことのできた「財産」に感謝している。最後にりましたが、新潟高校野球部の甲子園へ向けての健闘を祈るとともに、伊藤修前監督、富田孝男前部長、倉繁正志監督ならびに加藤幹男部長の益々のご活躍を祈念して締めくくるとさせていただきます。

平成十三年五月十九日、大助古町店にて平成十三年年度総会が開催されました。66期から101期までと幅広い年代の会員が出席し、また今回教頭の和田先生(二十数年前にも新潟高校に勤務されており、バドミントン部の顧問もされておりました。)と顧問の吉原先生も出席して下さいました。

議案として平成十二年度事業報告、決算、十三年度事業計画案及び予算案は原案どおり承認、役員改選については北村会長以下全員留任となりました。

議事後、懇親会へと移行同期また先輩後輩のあいだで旧交を暖め、当時の部員との間で昔話もはずみ、全員楽しい一時を過ごしてお開きとなりました。

六月十七日には春期ゴルフ大会が新津カントリークラブで行われ、梅雨に入りましたが会員の精進の良いせい快晴のもと9日ペリア戦で行われ、優勝行形和也さんという結果でした。秋も行う予定しておりますので、次回出てみたいという方はクラブの幹事まで連絡をいただければ案内をさしあげます。

次の行事は恒例となりました現役との練習会及び交流会(バーベキュー大会)を予定しておりますので多くの方の参加をお願い致します。

同期会を開催せよ!

宮崎 清也 (84回)

クラスによっては、毎年欠かさず同期会を開催しているようにですが、クラスを横断する同期会の開催はありませんでした。高校時代、我々は学年が進むごとにクラス替えがあり、そのためか、クラスに対する愛着、記憶等々がかなり緩い状態になってしまいました。卒業時のクラスが何組であったかを憶えていないというものが多数いました。卒業時に決めたクラス幹事も機能していません。現在の連絡先も不明であることが多く、同期会開催には相当の困難が予想されました。

まずは、同期会開催に向けて、幹事作りから作業に入りました。とはいえ、同期会開催のために幹事を募集しています、ということでは予想されませんでした。

そこで、「青山総会開催日の夜、お久しぶり同期食事会飲み会を開催します」として声を掛け始めました。年齢的に、仕事も育児も最も多忙なときです。連絡をしても、仕事があえ、子供があえ、という答えが多く大量動員は望めません。結局、総会開催の十四日の夜は十三名が集い、深夜まで騒いでいました。

一応、二〇〇一年一月二日に同期会開催を決めました。が、その後の動きはゆっくりとしたものでした。

九月十月食事会飲み会を開催しましたが各四名参加。十月末には、同期会を開催するぞ、あなたも幹事!と無理やり十四名を集めました。

一〇〇名参加同期会!を決議したものの、十二月三日に人数確認の幹事会を開催したところ、参加確定人数は三十余名。これでは一〇〇名には程遠く、実に暗い会合になりましたが、そこからの立ち直りは、驚異的な早さでした。その場でクラス幹事の枠を取っ払って、ただひたすら募集を図ろうとなり、それから怒涛のごとく電話、FAX、インターネット、面接、偶然、等々、活発に呼びかけました。

二〇〇一年一月二日の同期会には、なんと、一七名が集結しました。実質二ヶ月の活動で

これほど集まるとは! クラス担任の先生方も皆健在でありました。田村規矩夫先生、森幸雄先生、横山真雄先生、石黒明徳先生、澤田俊一先生、大湊忠男先生、高橋満先生、星智信先生が出席くださり、若々しく元氣な姿で、我々に感激を与えてくれました。大橋禎助先生、田村誠一先生は欠席されましたが、力強いメッセージを伝えてくれました。ありがとうございます。

同期会会長には、行田充を選出し、また、同期会の名称を八四会（ハチヨンカイ）と命名しました。

皆の高校時代の思い出がよみがえり、開会の挨拶を待つことなく、会場は盛り上がりました。体型美形の変化に戸惑い、名札の氏名を確認しあって、抱き合い、酒を酌み交わす。卒業以来二十余年ぶりの同期同級は、高

校時代の話に嬌声を上げ続けるのでありました。それから、二次会、三次会、四次会と続いていき、明け方まで続いたそうです。

ちなみに、当日の狂乱振りには、後日、インターネット上の同期会HPにアップされ、今でもその盛り上がり方を伝えています。次回は、二〇〇四年開催かな？

は自由型のクロールストロークだったから、泳いでいる時と同じような、上腕三頭筋や広背筋に負荷がかかっていることがわかった。

四、五人分取り付けたのでいっせいにやると、滑車の音がガリガリと室中に響いた。袋を二つづつさげてゆっくり引いている者もいたし、背泳の者も後ろむきになつてうまく工夫していた。しかし、その後、この方法が伝統的に定着したという話はきいてない。

ハイティーン水泳

新中・新高 33

平田 大六 (60回)

58 筋肉トレーニンゲ器

来年もう一年、それで私の水泳も終り、私はそう考えていた。高校二年の秋、一九五〇（昭二五）年。来シーズン開幕まで七ヶ月である。その頃は屋内プールはないから、秋冬は寒くて泳げない。このプランクは痛い。皆と同じ条件で冬を過せば、勝つことはむづかしい。

そのような悶悶（もんもん）としたある日、大黒善弥（50回）監督がプールへ来られ、ひとつのアイデアを示された。それは、主として腕で動作と負荷のかかる場合と同じ動作とできるトレーニンゲ装置だった。具体的には、

プールの部室の鴨居（かもい）に滑車をつけ、それに砂袋をつりさげたロープをかけて手で引っぱるのである。水平に引けば効果的なのだが、少し高い鴨居でもやむを得ない。

材料の調達と取付けにかかった。小さな滑車とロープは、ヨットをやっておられた大黒監督が船舶の艀（ぎ）装具具のものを探してくれた。砂を入れる袋は部員がそれぞれ二個づつ家庭で縫って持ちよった。取付は皆でやった。ノコギリは乱暴に使ったが、どうせ学校の建物なのだから。早速使ってみると、私の場合

その内容は。平田は、今シーズン八試合一六連勝で国体以外はすべての大会で優勝した。三年生になる来年もそうあってほしい。しかし、平田は最近色気（いろけ）がついてきた。これから云う三つの掟を守らなければ覇者の座を失うであろう。

「よいか掟は守るか」

掟の前身はわからないが、否と云えばとんでもないことになる。酔ってもいる。

ハイ守ります。

59 三つの掟（おきて）

秋の遅い夜更のことである。姉と二人で間借りをしていた室の外の表通りに足音がし、止まった。

「ヒラタ クーン」

かん高い男の声が出て、出てみると大黒監督だった。そこまで一緒に歩これ？

ついてこいや。

大黒監督はひどく酔っていた。並んで歩いた。

大通りにも通行人はいない時刻だ。松波町の坂を登って水道町のほうにむかっている。静かな住宅通りに二人のゲタの高歯の音だけが大きい。

大黒監督は絶え間なく話し、時々泣き声も混じってくる。

掟の一。煙草を吸うな！肺活量が小さくなるから。当時私は、水中で二分間潜っていることができた。煙草は吸っていない。

掟の二。酒飲むな！生活が乱れるから。しかし平田の家は酒蔵だからしかたないか。オレにも酒少し持ってこいや。

私が生れてすぐに父は病没し、兄も戦死したから、小学六年生以後私は時々主人役として正式にいろいろな宴席に出ることがあった。

掟の三。女遊びはするな。水泳に身が入らなくなるから……。過ぎた夏に私は、時々逢う女生徒の一人に、蒼い想いをもっていた。それを大黒監督は知っていたのか。そんなはずはない。

- 「私は、なにもしません。思ってるだけでもダメですか」
- 「なにや？も一度云うてみれ！」
- 「女ごのこと、考えるのも悪りんですか」
- 「あたりまえだこて！バカヤロー！」
- 一喝。また泣き出された。
- 強烈な一撃。私が一六才だった。
- ◆◆◆◆◆
 - ◆◆◆◆◆
 - ◆◆◆◆◆
 - ◆◆◆◆◆

後輩の活躍

- 1陸上競技部
- 男子砲丸投げ
- 5位 大島 薫
- 男子棒高跳び
- 5位 鱒 陽介
- 以上 北信越大会出場
- 2柔道部
- 男子団体ベスト16
- 女子個人52kg級
- 2位 美濃川理矢子
- 北信越大会出場
- 3空手道部
- 男子団体 3位
- 女子団体 3位
- 個人組手 3位 佐々木玲
- 以上 北信越大会出場
- 4フェンシング部
- 男子個人フルール 高橋和秀
- 北信越大会出場
- 女子団体 1位
- 17水泳部
- 16テニス部
- 15弓道部
- 男女団体予選リーグ敗退
- 14バドミントン部
- ベスト8
- 13サッカー部
- 12卓球部
- 11ラグビー部
- 10ソフトテニス部
- 男子団体3回戦
- 個人 田村・佐藤 1回戦
- 有波・小柳 1回戦
- 石津・小林 3回戦
- 青木・近藤 3回戦
- 女子団体3回戦
- 個人 前田・青木 3回戦
- 吉井・佐藤 3回戦
- 永野・半田 3回戦
- 9バスケットボール部
- 男子2回戦
- 女子 大会期間中
- 男子2回戦
- 6剣道部
- 男子団体 1回戦
- 男子個人 板垣 ベスト16
- 女子団体 予選リーグ敗退
- 7山岳部
- 8バレーボール部
- 男子2回戦
- 女子1回戦
- 5ボート部
- 男子4+3位
- 北信越大会出場
- 北信越・全国大会出場

〔文化部〕
18将棋部

男子団体 1位

女子個人 1位 窪 瑠子

以上 高文連全国大会・全国

高校将棋選手権大会出場

母校は今

校舎竣工及び

創立百十周年について

今年も各期の方々の学校訪問が盛んです。遠方から来られる方のことを考慮して、また夜の会合が控えていて、土曜の午後という期が圧倒的に多い。学校行事との兼ね合いで少しあわてる事もありますが、そのこと以外では別にかまいません。六月には青陵祭の前日に校舎を案内しましたが、連絡をいただいた期とは別な期も来ておられました。充分にご覧いただけただか、少し心配が残ります。

六月十三日には学年幹事の鍵富馨さんからの連絡で、43回の方々の訪問をいただきました。年配の先輩だけ肩を持つつもりはないのですが、「これが最後だから」という言葉に弱いのです。いえご冗談を、まだまだですよと思いつつ、つい案内にも力が入ってしまいました。昭和十一

年卒、だそうです。若い期の倍くらいの時間をかけて校舎内を回りましたが、ご同伴の奥様方を含めておよそ二十名、皆さんお元気で昔の腕白時代を語っていただいたり、ご立派としか言いようがありません。

市橋敏雄さんがおられました。彫金家、日展評議員、と同窓会名簿に出ています。ご寄贈くださった花瓶が校長室に置いてあります。あつたはずです。全員で校長室に入って、花瓶に再会し、鑑賞しました。市橋ご夫妻の前に、宮沢校長と一緒にほつと安堵の息をついたのです。思い返せば、この花瓶はここ数年旧校舎、プレハブ校舎、新校舎と、常に校長室に置いてあったものでした。作者ご自身に芸術作品をおろそかにしないように注意を受けた感じがして、恐縮すると同時に感謝した次第です。まあ、校長室にはあんまり用がないから、などという憎まれ口はたたかないことにして。

関屋俊彦さんの百号の絵を、先日ようやく受領しました。一昨年来、この会報にも出ていたのですが、ご寄贈くださるというのに受け入れ態勢がなかなか整わずに延び延びになっていたものです。現段階でまだ校内には

展覧してありませんが、いざ目の前に現物の作品を見せられると、現金なもので早く生徒の目に触れさせてあげたいという気持ちになつてきます。生意氣をいいますが、そのくらい美しい絵です。

新校舎建設に伴って、右のような書画骨董の類を一旦梱包しました。多くはまだそのままにしてあります。専用の場所はありませんですが、展示用のスペースがありませぬ。そこを工夫して早く何とかするのが役目なのですが、自分から言い出しておいて何ですが、いい考えが浮かびませぬ。とりあえず、散逸する心配だけはないことにしよう

と心がけていますが、その先はもうしばらくお待ちください。また、いいアイデアをお持ちの方がおいででしたらぜひご一報いただきたいと思ひます。

職員

職員の異動

(平成十三年四月)

全日制	退職	転出	転出先
教頭	渡辺 憲		小出高校長
教諭	須佐幸平		新発田南高
〃	八木文雄		巻高
〃	木津正新		枋尾高教頭
〃	富田孝男		新瀧向陽高
〃	加藤 弘		新発田高
〃	石崎和美		退職

校舎竣工及び創立110周年記念行事について

この10月20日(土)に行われる記念行事について、その概要がまとまりましたのでお知らせいたします。

【記念式典】

- ◆ 期日 平成13年10月20日
- ◆ 会場 新潟県立新潟高等学校 第一アリーナ
- ◆ 時間 午前9時開始
午前9時45分終了
- ◆ 参加者 来賓、同窓会、PTA、生徒、職員、その他

【講演会】

- ◆ 期日 平成13年10月20日
- ◆ 会場 新潟県立新潟高等学校 第一アリーナ
- ◆ 時間 午前10時開始
午後12時30分終了
- ◆ 講師 河合雅雄様
兵庫県立人と自然の博物館館長
京都大学名誉教授
佐藤幸治様
近畿大学教授

京都大学名誉教授
司法制度改革審議会会長

【祝賀会】

- ◆ 期日 平成13年10月20日
- ◆ 会場 ホテル新瀧 [飛翔の間]
- ◆ 時間 午後5時開始
午後7時終了
- ◆ 会費 7,000円
以上です。

なお、青山同窓会会員の参加につきましては、竣工記念及び110周年の、記念事業にご寄付いただいた方には個別に案内をお出しいたします。それ以外に興味をお持ちの方は、同窓会事務局にお問い合わせください。

また、校舎竣工ということで本校体育館である第一アリーナを式典と講演会の会場に使用いたしますが、収容人員が1,700人となっております。参加者数を絞り込むことはしない予定ですので、参加希望者の数によっては第二アリーナにおまわりいただいて視聴覚機器を介した参加、となる可能性があることをお含みおきいただきたいと思ひます。

教諭 渡辺哲雄 新発田商高
 “ 伊藤 修 高田北城高
 “ 金子 紘 退職
 非常勤講師 曾我 浩 退職
 “ 古田裕子 新潟中央高
 通信制
 教諭 古田 裕 新潟商高
 “ 前川正昭 退職
 “ 小林智之 新潟高
 “ 坂井 章 有恒高教頭
 “ 遠藤 浩
 “ 磯貝四郎 白根高
 “ 狩野芳明 新潟中央高
 “ 倉石義範 新潟北高
 非常勤講師 小畑洋一 相川高
 非常勤講師 登石泰幸 江南高
 “ 渡辺信子 退職
 事務
 事務長 大山暁彦 退職
 主任 井川浩幸 新発田財務
 主査 南場 正
 司書 熊木寛子 小千谷高
 新潟農地農用地課
 “ 倉繁正志 両津高

“ 井之川豊 新潟商高
 非常勤講師 坂上結希 新潟中央高
 通信制
 教諭 伊狩 淳 寺泊高
 “ 西倉直樹 八海高
 “ 小黒圭介 長岡高
 “ 井村雅人 村上高
 “ 飯塚 清 新潟東高
 “ 金子達雄 村松高
 “ 大瀧洋一 安田高
 非常勤講師 荻原富士弥 長岡大手高
 非常勤講師 伊藤 敏
 “ 広野美幸
 “ 半藤良子
 事務
 事務長 山田三千夫 新潟福祉所長
 主任 片桐早苗 新潟商高
 主査 上島秀樹
 司書 米田陽子 新津南高
 企業施設管理係
 “ 倉繁正志 両津高

編集後記

◎東京の新人歓迎会、四月に東京で新しい生活を始めた後輩たちの歓迎と激励の会。新人に年の近い会員が、司会したり、役割分担していました。良き伝統を育てる東京青山同窓会に乾杯。
 ◎同期会のすすめ、84回陰で奉仕の皆さんご苦労さん。宴の後の充足感。今後よろしく。(石)

平成12年度青山同窓会会費納入者追加分

(12月下旬より4月までに納入のもの)

納入先：
 郵便振替口座 00650-7-4455 青山同窓会

39回 鷺 沢 五 郎	宮 坂 達 夫 村 山 玄二郎	富 山 和 夫 61回 猪 間 驍太郎	66回 池 田 葵 春 鈴 木 興 彦	71回 小 林 碧 生 高 橋 紘 三郎	玉 井 正 光 76回 後 藤 德 広 丸 龜 行 雄	渡 辺 眞 也 82回 青 木 藤 好
41回 高 橋 英 雄	森 重 郎 53回 飯 島 鉢 良	関 根 理 62回 安 達 正 平	丹 羽 真 孝 松 澤 孝 孝	中 村 健 三郎 中 沢 京 子	渡 辺 眞 也 77回 猪 股 律 子	青 木 純 一 83回 五十嵐 謙 一
42回 飯 田 利 男	片 桐 憲 吾 久 代 和 夫	近 藤 琢 也 佐 藤 晃 一郎	吉 田 六 左 門 渡 辺 正 弘	渡 辺 尚 武 鈴 木 孝 一	猪 股 律 子 遠 藤 良 二	五十嵐 謙 一 川 上 誠 久
43回 間 由 夫	篠 原 長 彦 高 橋 勝 弘	佐 藤 晃 一郎 鈴 木 勉 聰	池 隆 夫 一 前 茂 夫	青 海 道 寛 伊 藤 美 智 子	杉 崎 眞 実 子 78回 五十嵐 祐 司	川 上 誠 久 窪 田 伸 滋
44回 近 藤 芳 生	山 崎 典 夫 54回・55回 佐 藤 壮 一	鈴 木 勉 聰 高 橋 聰 三	川 崎 ヒロ子 山 口 文 夫	青 海 道 寛 伊 藤 美 智 子	上 田 久 雄 遠 藤 和 男	鈴 木 伸 滋 宮 下 敬 子
45回 稻 葉 敏 郎	砂 山 一 晃 千 葉 一 雄	水 野 一 63回 荒 井 正 滋	山 田 尚 男 鈴 木 正 幸	阿 部 裕 子 榎 内 德 吉	大 井 聡 男 久 住 民 男	原 鍊 太郎 登 石 守 修
46回 稻 野 藤 三郎	津 野 民 男 56回 久 保 田 剛 敏	岡 崎 勇 二 片 桐 重 雄	古 館 信 生 69回 岡 田 尚 子	阿 部 裕 子 榎 内 德 吉	大 井 聡 男 福 原 等 実	横 山 修 84回 相 田 百合子
47回 木 村 和 郎	近 藤 源 也 斎 川 和 平	小 林 章 营 中 村 輝 夫	小 白 川 英 二 郎 長 浜 勝 介	加 門 文 隆 黒 木 勝 紀	大 井 聡 男 福 原 等 実	山 口 英 俊 85回 佐 藤 隆 司
48回 佐 野 廣 介	廣 横 山 芳 郎 58回 本 永 祐 嗣	白 井 僖 夫 64回 青 野 啓 慶	細 野 秀 夫 桑 原 秀 夫	黒 木 勝 紀 関 口 賢 太郎	桑 原 直 樹 江 花 和 郎	高 橋 聡 子 86回 高 橋 聡 子
49回 石 本 保 孝	池 田 正 文 小 柳 佳 一郎	伊 藤 勝 慶 佐 藤 茂 司	桑 原 秀 夫 70回 五十嵐 健 也	阿 部 裕 子 榎 内 德 吉	桑 原 直 樹 江 花 和 郎	高 橋 聡 子 87回 大 久 保 純 一郎
50回 大 黒 善 弥	池 田 正 文 小 柳 佳 一郎	高 木 睦 弘 田 中 恒 夫	小 沢 欣 治 風 間 秋 利	阿 部 哲 夫 多 田 毅 真 介	桑 原 直 樹 江 花 和 郎	高 橋 聡 子 88回 遠 藤 栄 子
51回 寺 田 秀 夫	唐 津 藤 進 佐 藤 彰 栄	藤 沢 靖 郎 65回 三 林 輝 夫	柴 田 忠 臣 森 井 邊 介	上 田 清 千 星 本 三 南 渡 部	桑 原 直 樹 江 花 和 郎	高 橋 聡 子 89回 田 辺 文 幸之助
52回 河 桑 名 昭	中 村 卷 国 藤 卷 邦 一	三 林 美 奈 子 三 林 利 夫	柴 田 忠 臣 森 井 邊 介	上 田 清 千 星 本 三 南 渡 部	桑 原 直 樹 江 花 和 郎	高 橋 聡 子 90回 田 辺 文 幸之助
坂 井 保 也	五十嵐 邦 明 高 橋 明 男	村 木 利 治 彦 吉 田 治 彦	近 藤 光 男 藤 光 男	上 田 清 千 星 本 三 南 渡 部	桑 原 直 樹 江 花 和 郎	高 橋 聡 子 90回 田 辺 文 幸之助

川上康夫 神戸和彦 北原宏一 木村泰博 久保田愛子 倉田由美 小泉仲之一 小林浩子 高坂君章 斉藤隆輔 坂井富士雄 佐川富士夫 佐藤和明 佐藤晃一 佐藤たつ子 佐藤俊夫 佐藤玲義 三膳義興 庄司行雄 白保博史 新鈴木正昭 鈴木橋由隆 高田中勝彦 田中澤龍進 谷土島宗厚 豊内川徹 中西山常史 野村正宏 長谷川陸彦 林田和則 平藤卷大 藤井田和 前田徳章 吉谷湯保 松丸三村 丸保圭子 三井玲子 村山芳隆 吉川憲二 横槻久夫 若部至幸 渡吉田英 吉田郁男 80回 S47年 阿部淳一 池川隆明	岩橋浩司 位田和彦 植木邦彦 遠藤利光 太田啓善 大小塚善 小野片秀 加藤新 神原隆 菊淵雅 杵小池亮 小斉藤一 坂上富 佐白井文 高棚橋明 田玉木友 玉津野正 長羽鳥政 本間康 81回 S48年 相朝荒五 井井川常 五十藤則 小野島正 片桐利穂 北田久美 須出千昌 小越藤直 近斉坂田 光弥昭義 佐沢鈴木 白鈴木優 鈴砂木了 高武田尻 田張富中 長	成野平広 藤本本 前川松丸 山田 82回 S49年 荒井川育 池田崎昂 石崎清隆 生井晶 上ノ山塚 大押野間 風下部原 日栗幸小 小駒上佐 坂津戸中 成野廣 本松真宮 宮目山八 藤渡渡 83回 S50年 浅間植牛 五十嵐木 植遠岡 風	林太郎 良栄明 子美修 子晴子 子徹郎 子司徹 誠子 育勝一 崎昂清 井晶英 塚嘉朋 道克し 立早介 明裕郎 昭裕穂 明子 恵子 誠一 一正茂 義剛宣 健朗義功 宏光潔 磨理子	荻岡奥片 加河菊木 熊佐高 高玉塚中 仲中長 浜藤古本 松水宮森 山吉若渡 和相阿五十 石今大岡 小黒川黒 桑小小林 小小近郷 齊鈴高 田高田島 84回 S51年 相場部五十 石崎井須 岡黒村川 桑小林小 小小近郷 齊鈴高 田高田島	則幸平野明 美佐都博 幹稔司俊司 貢正康 みや子二 梯二慶 克慶人子 禎裕雅ス イ昌恵衣 知直祐 憲和章 由貴子 房桂敦 忍昭幸 文隆也 一郎晴 明津江 仁二香 奈幸史 正公男 秀扶二 敬紀建 裕和達 郎	平野明 本丸山 村上岡 崎田川 行芳川 85回 S52年 雨木若慶 石田富美子 大沼文男 奥原村和 川桑原林 小齐塩白 須高野内 竹筒戸中 庭野芳孝 亮弘 星宮宮村 山山山山 渡渡渡渡 86回 S53年 阿部保聖 阿保聖 五十嵐健 伊藤健 稲岡加賀 白倉瀬高 高田王坪 外中宮 藪八吉渡 渡	87回 S54年 荒川一成一 五十嵐昌子 石川裕智 井上博一 今川朋子 大野直子 奥村克彦 小野和宏 加藤真理子 酒井和江 清水忠基 白柏基宏 Saltzgaber純 土屋真恭 藤本多俊 松田佳則 山田治之 88回 S56年 池田全之規 石原基毅 岸亮一 君村裕毅 小草間博 小竹聡亮 新保孝之 常木郁望 坪井順久 内南場充 長谷川一 藤本間一 三木村渡 渡渡渡渡 89回 S56年 相場惠美子 池信平一 石原綾子 今井あかね 加島彰二 川倉井佳 倉田村直 野野正	吉井雅典 渡邊克彦 90回 S57年 池元太郎 石見鉄夫 岩谷淳透 神田恭広 斉藤今日子 白須洋二 土屋亨器 徳永泰子 深川充栄 和田隆資 91回 S58年 市川健隆 本間正隆 92回 S59年 河内康志 北尾彰朗 松沢寿重 93回 S60年 城田和美 95回 S62年 浅岡俊宏 96回 S63年 鈴木周 97回 S64年 北西奈穂子 99回 H3年 宇田達 佐藤いと 松田哲朗 101回 H5年 鈴木由貴子 渡辺和惠 102回 H6年 伊部琴音 107回 H11年 宮島望 通信制 248名
--	--	--	--	--	---	--	---	--

